

日本語とドイツ語の間に横たわる河

ギンジツク恭子

最近、平野啓一郎氏の『ある男』がドイツ語に翻訳・出版された。英語版はすでに出ていたが、平野氏はドイツ語圏では初のお目見えとなる。どんなに日本で話題になっている作品でも、翻訳されなければ、違う言語圏の人たちには伝わらない。

知り合いにスイス人の翻訳家がいる。日本で20年以上暮らした後、数年前に戻ってきた。日本にいる時から翻訳の仕事をしてきた人だ。その彼の翻訳を巡る講演会が面白かった。小説の翻訳をしていなくても、日本語をドイツ語に置き換えて、的確に表現する苦労はよくわかる。英語とドイツ語の間の翻訳も簡単なものではないと思うが、難易度のレベルが違う。この二つの言語は親戚みたいなものだが、日本語はまったく血縁関係のない他人である。講演では、オノマトペをどう訳すとか、女性的な言葉遣いをどうするかとか、曖昧表現をどうドイツ語で伝えるかなどなど、いろいろ

ろ頭を悩ます苦労話のエピソードが語られて、いちいち頷けるものばかりだった。

「黒の舟唄」の歌詞を借りて少し振れば、日本語とドイツ語の間には「深くて広い河がある」。これは、日本語と英語に関しても言えることだが、全く構造が違うのだ。だから、その河に舟を出して行き来するのは容易ではないし、時に疲れもする。けれども、対岸を眺めているだけでなく、渡ってその地を歩くことは興味深いことでもある。子供の頃からのバイリンガルは別かもしれないが、大人になってから習得した外国語は、いつまで経っても外国語だ。た



チューリッヒ近郊の町から湖を望む

た

だ、大人になってから外国語を身につける利点もある。それは、母語がすっかり入っているということ。そして、それはまた、母語の背景にある文化が身体の中に入っているということでもある。言葉は文化と相互関係にある。だから、日本語を母語としているということは、日本的な物の見方、振る舞いも知らずに身につけているということになる。そのしっかりした土台の上に外国語を習得すると、比較して物を見ることができやすい。ある意味、言葉を通して違う文化をより理解できようになる。土台がなければ、比較ができない。つまり、測る基準が内になければ、それぞれの文化圏で暮らす人間たちの共通性や違いを見つけない。人間の基本的感情は人類共通だし、長年こちらで暮らしていると思うのは、人間は皆同じということだ。しかし、感情や考えの表し方や態度は、文化によって異なる。もちろん、人には個性があるから一概には言えないが、大きく括れば、生まれ育った言葉の文化の影響は大きい。

こちらに来たばかりの頃、ある先輩の日本人女性が話してくれたことが面白かった。ドイツ語で挨拶する時には自然と身体が反るし、日本語の時は少し前屈みになると言うのである。こちらでは握手をするから、確かにそうかもしれない。私たち日本人は、挨拶をする時にお辞儀をする。会釈というのだろうか、それが身についている。ところが、日本語を習っているこちらの人がそれをする時、少しぎこちない。身につけていないのだ。私もドイツ語で挨拶する時には、前屈みのお辞儀

はできない。ちょっと微笑んで首を傾げるくらいだ。

微笑むと言えば、日本人の友達が面白いことを言っていた。彼女の娘さんは、父親はスイス人でこちらで生まれ育っている。その子がまだ10代の生意気盛りの頃「ママは人と会う時、なんで理由もないのにニコニコしているの?」と、反発気味に聞いたのだそうだ。なぜだろう、それは私たちの世代の女性は、人と接する時は感じよくしなさいと教わってきたからなのかもしれない。その娘さんに言われてみれば、こちらの女性たちは、理由がなければとくに笑顔を作るわけでもない。こちらでは、日本は「微笑みの国」と言われている。

また、英語もそうだが、ドイツ語には日本語のような男言葉と女言葉がない。私は映画が好きで、子供の頃からテレビで洋画番組をよく観ていた。テレビでは、外国の俳優さんも日本語を喋っている。女優さんはもちろん女性言葉で、男性より優しい喋り方だ。だいたい少し古いハリウッド映画やフランス映画が多かったから、とくに女性は「そうですね」とか「そんなこといけませんわ」とか「ご覧になりました?」とか、昔の日本映画でもそうだったが、そういう口調だった。ところが、初めて同じ映画をオリジナルで観た時は驚いた。男女に差がない! キャサリン・ヘップバーンもイングリッド・バーグマンもあんなに女らしくは話していなかった。言葉も社会と共に変

化するから、最近では、日本語も男女の差があまりなくなっているのかもしれないが。

言葉の視点からの男女の違い、年齢の上下関係で面白いのは、相手（あなた）の呼び方である。ドイツ語には、いわゆる丁寧表現である Sie と、親しい間柄での呼び方 Du がある。日本語では、二人の人間が直接話している時に、普通は人称の呼びかけは行かない。だが、ドイツ語の場合は、文の構造上それが必要である。それに伴って動詞も変化する。たとえば、日本語で二人の人間が話していて、「行く?」と聞けば、断りがない限り大抵は相手のことだ。あるいは、関係性によって「行きますか?」「いらっしゃいますか?」になる。自然な日本語に「あなた」は必要ない。ところが、ドイツ語の場合は、親しければ “Gehst Du?” だし、少し距離があれば “Gehen Sie?” になる。そして、この Sie と Du には男女の違いや年齢の上下は関係ない。違いは、Sie を使えば丁寧な話し方になるということだ。親しくなった頃合いを見て、Sie から Du への移行のお伺いをする。Sie の時は苗字で呼び合うが、Du になれば、ファーストネームだ。子供の場合は、知らない子でも、大人は Du と呼びかける。子供から大人に対しては、小さい子を除いては Sie である。学生同士は最初から Du が普通のようなものだ。ドイツでは、Sie から Du になるまでは時間がかかると聞いたことがあるが、最近のスイスでは、若い人たちはけっこうすぐに Du を使うらしい。英語の you の感覚なのかもしれない。ただ、面白いのは、たとえば、アメリカ映画のドイツ語字幕を見て

いると、ファーストネームで呼び合っている、関係性によって you を Sie だったり Du だったりに訳している。さて、こちらでの日本人同士の話である。一つの面白い例を挙げよう。ドイツ語学校で同級生だった男性がいる。ドイツ語で話す場合は、私たちはもちろん Du の間柄なのだが、彼は私より四歳年下なので、日本語では私に対して丁寧体で話す。けれども、彼は私をファーストネームで呼び、私の方は彼の苗字で呼ぶ。日本語で男性を下の名前で呼ぶのは、家族か親戚、あるいはかなり親しい間柄という社会的雰囲気があったから。今の若い人は違うのかもしれないので、昔の話だと断っておこう。ただ、こちらにいる日本人の場合は、今も大抵の人がそうである。お友達の女性同士でも、お互いドイツ語では Du の間柄だが、日本語では、ファーストネームで呼びあっても、年上の人には丁寧体で話すのが普通だ。年上の方は、親しければ普通体、そうでなければ丁寧体と普通体を混ぜた感じ。その辺に関係性の綾があつて面白い深い。

日本語は、関係性に即した言葉だと思う。それは、英語やドイツ語の「わたし」と日本語のそれを比べてみるとわかる。英語では、どんな状況でも「わたし」は I、ドイツ語は Ich、である。フランス語もスペイン語も皆ひとつだ。ところが、日本語の場合は、関係や状況によって様々に変わる。たとえば、仮に、ある大学教授の男性を例に取ってみよう。彼が講演する時は、たぶん「わたくし」、学生に講義する時は「わたし」、直接話す時は、たまに「先生」と言うかもし

れない。学生時代の同僚には「僕」か「俺」。家庭で子供に対しては「お父さん」だろう。講演で「僕」と言う方を聞いたことはあるが、一般的には「わたし」か「わたくし」だと思う。女性の場合は、京都や大阪では「うち」と言う。子供には「お母さん」「ママ」など、子供の目線から自分を呼ぶ。相手を基準に幾つかの役割を持つ自分がいるのだ。その辺が、日本語はとても面白い。

一方、「あなた」にあたる言葉も、先ほど書いたようにドイツ語では先の二つだが、日本語は多様である。そこがまた、ドイツ語の小説を日本語に訳す時の難しさだ。二人の関係の解釈によって、「あなた」「あんた」「きみ」「おまえ」などと、いろいろ考えられる。日本語を習っている外国人は、テキスト通り「あなた」を使うだろう。もし、夫が日本語で私を呼ぶとしたら、どの単語だろうと考えてみる。「きみ」かなあとも思うが、どうだろうか。

ヨーロッパ言語と日本語の間の翻訳や通訳は、なかなか大変な作業だ。とくに、冒頭の翻訳家の苦労話のように、文学作品の翻訳には難しいものがある。同じ作品でも翻訳者によって、だいぶ雰囲気が変わってくる。だから、訳者の名前も大きく書かれるし、作品を挙げるときは、誰々訳の、という注釈もつくわけだ。

毎日の渡し舟は、時にストレスになることもあるが、それでも水の音を聞き風を感じながらの河渡りは、なかなか捨てたものでもない。